

商店街の福引きで、とんでもないものが当たってしまった――

渡されたマイクロビキニに着替えた私は、キングサイズのベッドに腰掛け、縮こまっていた。

室内は落ち着いたお洒落な家具で統一され、明かりが絞られている。

高級感のある静かな場所に対して、私の心臓は忙しく暴れてバクバクと煩い。

更には良い香りのするお香が焚かれているのに、この体はリラックスするどころか緊張真っ只中であつた。

ただ、ちよつと興味があつて。ただ、折角ならつて思つて。

地元の寂れた商店街の福引きで、目玉商品であつたトチ狂つた一

等賞を引いてしまったから——だから魔が差して、来てしまっただけなんです。

そう心の中で言い訳をしながら、私はブルブルと震えていた。

（かかかか帰ろうかな!? まだ間に合うかな!?!?）

初めて利用するエッチなお店。ドギマギクシヤクしている私にも、案内してくれた店員さんは優しかった。

有名店らしいが、まるで詳しくないので店名を聞いたことすらなかった。

私はそんな、芋女だ。場違いな気がしてならない。

これから来てくれるのは、様々な種族から予約が殺到していて、今から予約したら三百年待ちとかなんだとか言うインキュバスさんらしい。そんな方にこれから、相手をしてもらうだなんて。口から心臓が飛び出しそうだ。

商店街の責任者はどうやってこの権利をもぎ取ったのか。金の力で譲ってもらったのだと思うが、果たしてその大金と商店街の復興は見合った金額だったのだろうか。

めちやくちや話題になって、集客効果が凄かったようだからある程度の効果はあったのだろうけど。それにしたって、なんて景品だ。当たったからとちやつかり利用している私も私だけだ。

全身の毛は処理してきたが、あちこちたるんでいるこんな体を見せてしまっているのだろうか。

もうそろそろ年もオバサンと言っているくらいだし——ああいや、人間は短命な種族だからインキュバスからしたら全然——グルグル、グルグルと。目も思考も回しながら、私は動けず硬直している。

「……ひいっ！は、はい！」

そうしているとコンコンとドアがノックされて、私は跳び上がり返事をする。

あまりの慌てように赤面するが、笑われることなく、扉の向こうから艶やかな声が入室を断った。

「ど、どうぞ！」

「はあい。お待ちせしました」

ドアが開いて、めっちゃくちゃ綺麗なお兄さんがやってくる。

肩近くまで伸びた銀髪と、紫の瞳。柔和で中性的な顔立ち。頭にあるヤギのような形状をした黒い角。手足が長く、スラリとした体躯。にこりと笑ってこちらに歩み寄ってくる姿に、私はボフツと首まで赤くして竦み上がった。

「隣、失礼するより。……わあ、すっごく緊張しているね」

「は、は、はひ……っ」

滑るような滑らかな動作で私の左隣に腰掛けたお兄さんが、私の様子を見て穏やかに笑う。

彼の右手がすり、と私の太ももを撫で、私はビクウ！と体をまた、跳ねさせた。

「あっ、あっ」

「ふふ、可愛いね。こういうお店を利用するのは初めてかな？」

太ももをスリスリされながら、耳元に唇を寄せられて。低くしつとりとした声で囁かれて、脳が溶けるような錯覚に陥る。

「は、はいい……っ」

「そっか。じゃあ初体験を、たっぷり楽しもうね……？」

「あううっ」

コツン、と額を側頭部に当てられ、すり、と頭を擦り寄せられる。頭部にあるつるりとした角が僅かに触れて、その感触にゾクリと

甘く腰が痺れた。

お兄さんから、恐ろしく良い香りがする。

インキュバスは人間より体温が高いのか、触れているところがどこもかしこも熱い。

「あう、あうっ、私、わたしい……っ」

「うんうん、大丈夫……。僕に任せてね。怖いことなんて無いからね？と耳元でまた囁かれて、ふうっと耳に息を吹き掛けられる。

「ひゃううっ♡」

「うん、可愛い声が出たね♡これからたーっぷり、その可愛い声を聞かせてね？」

一瞬でトロトロにさせられてしまった私は、帰ろうとしていたことも忘れて従順に頷いた。

「そうそう、僕の名前は聞いていたかな？シェードっていうんだ。

よろしくね」

「しえ、シェードさん……」

こちら名乗り、よろしくお願いいたしますと挨拶をすれば、丁寧
にありがとうねと囁かれて、また太ももを撫でられる。

「さあおいで？くつついてぬくぬくして、緊張をほぐしていこうか」
「は……はい……」

太ももにはすぐ触れられたが、デリケートゾーンはそうじゃない
らしい。

私はホツと胸を撫で下ろし、彼に手を引かれてベッドに上がる。

「嫌がらず着いてきてくれてありがとう。いい子だね。このまま僕の
体に凭れてくれる？」

「はいっ」

促されるままベッドの真ん中当たりに座ると、私はくるりと体の

向きを回転させた。そして両手を開いて待っていてくれるシェードさんの胸板に、そっと背中を凭れさせる。

「……優しいね。もっと思いつきり体重を預けていいんだよ」

「あ……っ！」

腕に囲われ、ぎゅっ、と抱き締められて——ふんわりとあの良い香りが鼻腔を擦った。

じわじわと。シェードさんが着ている施術服のような薄い布地越しに体温が侵食し、私の肌を焼く。

「線が細く見えるかもしれないけど、男だからきちんと力はあるんだよ？だから可愛いお嬢さん。安心して僕に身を任せてね」

「はっ、は、はひい……っ」

すり、とまたこめかみに額を擦り付けられて、しつとりと囁かれる。

低く深みのある声は耳心地が良くて、頭も腰も蕩けてしまう。

声を聞いているだけでゾクゾクと、してしまうのだ。

「ふふ、お膝をスリスリしているね。とっても可愛くてすぐにでも触ってあげたくなるけど……君の気持ちに準備が出来てからじゃないと、ビツクリしてしまうかもしれないから。後での、お楽しみにしようねえ」

「はい……っ」

指先で顎を引っ掛けられて、私は顔を横に向けた。

途端に視界に映る、美しい顔。

涼やかな目尻を垂らし、董色の瞳をとろりと蕩けさせて。すぐ傍から私の瞳の奥を見つめる。

「キス、しよう？ ゆるしてくれるかな……？」

「あ……、は、はい……して、ください」

一人で待っていた時とは違った意味で、心臓が暴れている。

目の前の美貌から、目が離せない。

職場にだって異種族の方はいるのに。ここまで自分とは違う存在なのだと実感することはなかった。

あまりにも美しい。あまりにも魅力的。

これが、『女』を魅了して虜にする、インキュバス――

顔を寄せられて。唇と唇が触れ合う寸前に私は名前を呼ばれた。

それにあらぬところがキュンとした瞬間、私達の唇が重なる。

「ん……っ」

「ふ……♡」

ちゅぴりと音を立ててすぐに彼の唇が一旦離れ、間近でこちらを見つめる紫に思考も視線も吸われる。

そうしていると、私はチロリと唇を舐められた。

「あ……、んむう……っ」

薄く開いた唇を熱い舌が搔き分け、口腔内に入り込む。

最初のささやかな口付けなど、搔き消してしまうほどに。私は熱烈な口付けを受けた。

「んんっ、ン、ふう……っ！」

「ふふ、ん……♡」

口腔内で彼の舌が縦横無尽に動き回り、奥で縮こまっていた私の舌を見つけ出す。

どうやら人間より長いらしい舌が、私の舌に絡み付き——じゅるじゅると根本から先端までを、扱きあげるのだ。

「んっ！ンッ！んん、んーっ♡♡」

喉には大きな骨張った手が這い、急所をそろりと撫でる。

ゾクゾクと腰が戦慄き、恐ろしく布面積が小さいマイクロビキニ

の下が気になった。

シーツまで濡らしているのではと心配になって視線を下向ければ、集中していないことを叱るようにヂュツ♡と舌を吸われる。

「んんっ！んうツ♡♡ふっ、ふうっ♡♡」

じゅるじゅるぐちゅぐちゅと舌や口内のあちこちを蹂躪されながら、甘い唾液を送られ、飲み下す。

ゴクゴクと喉を鳴らす度にお腹の奥がギュンギュンとして、苦し
い。

更には次第に頭がぼんやりとし始め、視界もブレ出した。

「ん……ちゅ、知ってる？インキュバスの体液には催淫効果があつてね」

「あう……あ、あ……」

口からゾロリと長い舌が抜け出しても。私は脳内を白く霞ませ、

碌に喋れない。

「沢山飲めば飲むほど、気持ち良くなれるから……いっぱい飲もうね？」

「は、う……」

左の太ももをスリスリ。首をナデナデ。

そうされながら、ちうっ♡と唇を吸われて。また口腔内に熱くながーい舌が入り込む。

じゅりじゅり、くちゅくちゅ♡

柔らかな感触に舌が撫でられ、再び扱きあげられる。

「ンツ♡♡はっ、ンうツ！」

足の間にも、胸にも、触られていないのに。

内頬を撫でられ、舌を扱かれ、太ももと首に優しく触れられているだけなのに。

唾液を飲み下している内に――蜜道が収縮し出す。

「い——つく♡♡」

「ん……」

遂にはビク、ビク、と体が痙攣して――
極まった快感に脳とお腹が、甘く痺れた。

「上手だね、じよーず……」

「お、ん……っ♡♡」

喋るためにずるりと一度抜け出た舌が、ぬぢりとまた唇を割って
振じ込まれた。ミツチリ♡と口腔内満たす。

「お、ぐっ♡♡」

それどころか喉奥まで入り込むと自在に形状を変えて上へ辿り、
右の鼻の穴からにゆるりと舌尖を出てしまった。

「お、ほ、お♡♡♡」

——驚くことに、痛みや苦しさがるで無い。

ただただ、気持ちがいいのだ。

喉奥から鼻への通り道を優しくにゅこにゅこと擦られているだけで、私の体は——ぶしやりと、潮を吹いた。

「♡♡♡♡♡」

「ふふ……♡」

ビクビクと断続的に腰が跳ね、目の前で光の粒がスパークしている。

一度にゆぷり♡と奥に潜んだ舌先が今度は左の穴から顔を出した。

「——♡♡♡♡♡ヒツ、ひっ♡♡」

潮吹きが止まらない。頭が、おかしくなりそうだ。

太ももを撫でていた手は私のお腹を撫で、首を撫でていた手は肩の形を優しく辿っている。その刺激のどれもが、とにかく気持ちが

良い。

こんな、天国があつたなんて。こんなに気持ちが良いのに、まだ序の口だなんて。

三百年待っても相手してほしいと皆が望む気持ちを、私は理解してしまった。

「ほ、お、おお……♡しゅご、お♡♡♡」

「ん、ふふ♡気に入ってもらえて何よりだよ♡」

ずりゆりゆりゆ、にゅぷんっ♡

狭い道を通って舌が抜け、口腔内から全て出ていっても。まだ擦られた粘膜が、ジンジンと熱を持っていた。

また、そこを擦ってほしい。舌を挟じ込んで息も何もかも奪い去って窒息させてほしい。そして、壊れるほどに気持ち良くしてほしい。

——そんな気持ちで紫の瞳を見上げるが、応えは無くにこりと微笑まれるだけ。

もう、唇を吸ってもくれない。

「あ、う……」

おねだりする言葉を紡ごうにも、口の中が気持ち良くて上手く喋れない。

鼻の奥がジンジンしていて、堪らない。ここを擦ってほしいのに。
「もう、気持ちいいことしか考えられなくなっちゃった？……可愛
いね」

「……あ」

ふんわりと左右から、乳房を掬い上げられる。

たゆたゆと揺らし、くるくるとビキニ越しに乳輪を撫でられた。

「あ、んっ♡ん、くっ♡」

「僕の唾液をたーっぷり飲んだから、感度が違うでしょ？布越しでもほら……♡こんなに、気持ちが良い」

「ひうう……ッ！」

カリカリと、薄い隔たり越しに乳首を搔かれて。お腹の奥へダイレクトに刺激が届いた。

私は大きく仰け反り、ギュンツ！と締まった蜜道が、絶頂に浸って蠕動する。

「お口まんこヨシヨシされてガチガチになっていた乳首……こうしてタラ、って唾液垂らして……ビキニの上から、ぬりぬり♡しようね」

「ああ、あつ、それ、だめになっちゃ♡♡」

沢山飲んで、デロデロのグズグズになった唾液を。インキュバスの催淫作用のある体液を。たっぷりと垂らされて、布越しに突起へ

塗り込められていく。

「うん、だめになつて？丸一日の予約なんだから、完全に体を、インキュバスのおまんこ仕様に換えられるからねえ。何もしなくてもイクイク出来るように、体を造り換えようね」

「なにも、しなくても……っ♡♡」

本来なら、ゾツとするとところだったのだろう。

けれどインキュバスの唾液でトロトロになった思考は快樂三昧の日々を思い描いて、体があまりの期待にピュッ♡と潮を吹いた。

「そう。立ってても、座ってても、何もしていなくても。ずーっと気持ちが良いくて、おまんこからピュッ♡ピュッ♡ってお潮を吹くんだ」

「おおッ♡♡お、おんっ♡」

きゅむっ♡と左右両方共乳首を摘ままれて、コリコリと転がされ

ている。

痺れるような快楽に体が断続的に跳ね、私はシェードさんの肩に後頭部を擦り付けて悦に浸った。

「でもそうになると当然、日常生活は厳しいから……インキュバスのお嫁さんになるしかないんだ。四六時中インキュバスおちんちんを挿入されて、一番催淫効果の強い精液漬けにされるんだよ」

「おおおッ♡ちくび、イクッ！ イッくう♡♡」

ヒソヒソと耳元で囁かれながら、コリコリされ続ける乳首で達する。それでも、乳首がコリコリ、コリコリ。止まらない。

「そんな濃ーい精液を子宮に注がれ続けたら、人間のお嫁さんはどうなると思う？——その体液に順応して、体が造り変わるんだ」

「ほお、おお、おーッ♡♡♡」

順応する生き物である、人間らしいよね。そう笑い混じりに話す

シェードさんが、ピンピンと爪で乳首を弾く。

「サキュバスに、なるんだよ。それで、旦那さんのインキュバスと同じ時を生きるんだ。だからずっと、旦那さんとエッチし続けられる」

「イツく！いくぅぅッ！！」

今度は右だけ乳首を根本から先端までシコシコと扱かれて、頭が真っ白になった。

腰がガクガクと痙攣し、下半身が勝手に暴れる。

もう吹き出すものが無いのか、尿道口が潮を吹きたそうにパクパクしているのがわかった。

「僕のお客さんってね、リピーターはいないんだ。なんで分かる？」

「おおおッ♡♡おゝッ♡♡おふッ♡♡おゝッ！」

右をシコシコされながら、左はビキニをずらされて爪で直接カリされている。

刺激の強さに逃げ出そうとしたところで足を絡めて開脚させられ、私は身悶えるしかなかった。

「みーんな新たな人生を歩み出して、お店の紹介でインキュバスの旦那さんを見つけたからなんだよ。要するにここは、エッチなお店だけど、インキュバスの縁結び場所でもあるってことなんだ」

「おおおンツ♡♡♡おイぐっ♡♡♡イくのおくくツ♡♡♡♡」

ぺろんと舐めた指が右のビキニの間に滑り込み、ぬるぬると唾液を直接乳輪へ塗り込む。

それすらも堪らなく、気持ちが悪くて。私はビクビクと全身を痙攣させながら、作られたばかりの潮を吹いた。

「僕は僕で相性の良い女性と出会えたら番うつもりなんだけど……

僕は力が強いからね。なかなか合う人がいなくて。そんな相手が見つかったら、すぐにでも引退しようと思っているんだけど……なかなか、ね」

「ひうううッ!! あーッ!!」

インキュバスの事情を語られながら、足を彼の足でスリスリ撫でられ、左右の乳首を直接指で弄られ、ひたすら絶頂を繰り返す。

お店の備品であるベッドは既に私が出したものでビシヨビシヨ。匂いもするから恥ずかしいのに、シェードさんは頻りに鼻を鳴らしていた。

「お嬢さん、もしかしたら僕と相性良いかも? 唾液は甘かったし、潮も愛液もすごくいいにおい。ふふ、とうとう僕も、番発見なるかな?」

「ぐんぐんッ!! ……あッ!？」

ぐにゆぐにゆと左の乳房を揉まれて身悶えていれば。ほんの少ししかない布地の上から、するりとクリトリスを撫でられた。

「ひぐッ——」

たったそれだけのことで私の体は、ブリッジをするかのように盛大に仰け反って。

大きすぎた快楽の濁流に耐えきれず——ブツリと意識を途切れさせた。

「あれ……？」

上の方から驚いたようなシェードさんの声が聞こえた気がするが——
——気のせいだったのかも、しれない。